



目次

1. FDシンポジウム実施報告
2. 部局FD活動紹介
3. 授業コンサルテーション報告
4. 外部セミナー参加報告
5. TA研修会実施予告

FD シンポジウム「高校生を大学生へと育てる」

FD 推進部 上野誠也

シンポジウムの概要

学生の質が変わったと感じている教員は多いと思われる。しかし、その変化に合わせて、授業方法を改善している教員の数は多いとは言い難い。今年度のFDシンポジウムは、入学してきた学生達に大学で学ぶスタイルを教える「初年次教育」に焦点を当て、学生の視野からの大学教育のあり方を考える場とした。

全体は三部構成とし、第1部と第2部は外部から講師を招いた。第1部は高校教員の目から見た高校生の実態を、第2部は予備校講師の立場から受験生の実態を紹介していただいた。第3部は国大の事例を紹介することをふまえて、学生を交えたディスカッションを企画した。

今年度のFDシンポジウムは、平成23年3月1日(火)に教育文化ホール大集会室を会場として開催された。教育人間科学部を中心とした参加者

が集まったが、年度末の忙しい時期とあって、参加者はやや少なめであった。今回は、第3部の登壇者に授業改善学生スタッフ(通称:学生FDスタッフ)のメンバーが含まれており、聴講者にも学生が参加した新しい試みであった。

プログラム

- | | |
|-------------|---|
| 13:10-13:15 | 溝口理事・副学長の挨拶 |
| 13:15-13:20 | シンポジウムの趣旨説明 |
| 13:20-14:20 | 第1部 高校の現状と課題
附属横浜中学副校長 松本 哲氏 |
| 14:20-15:35 | 第2部 高度に組織化された受験対策の現状と初年次教育の意義
全国学力研究会理事長 河本敏浩氏 |
| 15:45-17:15 | 第3部 本学の事例紹介とディスカッション |

第1部 高校の現状と課題

環境情報研究院 岡 泰資

講演に先立ち、横浜国立大学教育人間科学部付属横浜中学校の紹介があった。付属学校として、大学との共同研究や独自研究、国の拠点校、地域のモデル校としての研究活動と、より質と意識の高い教育の確保となる教育実習の二本柱の使命をもっていることが紹介された。また、現在取り組んでいる、中・高・大連携によるこれからの教育実践モデルについて説明があった。

高校生の意識調査結果を元に、教える側のスタイルの変化と学生側の変化の視点からの講演であった。

一般論として、「最近の新生はできが悪いね」、「こんなこともわからないのか」、「〇〇学校の先生は何を教えているのか」などの言葉は昔からある話で、評論家のような生産性のない議論ではなく、「全然駄目だね」という前に、高校生の実態を知りたいならば、自ら高校に足を運んで「見て」、「感じ」、対策を実行することが大事だと強調された。一方、学生側にも「耐える」、「我慢する」、「がんばろう」、「もう一歩前に進もう」といった意識が希薄になっている可能性もあるが、その他の要因として、情報過多についての指摘があった。高度経済成長期には、学生を含めた国民全体がほぼ同じ方向に向かって動いていた。しかし、グローバル化した現在では、どちらの方向へ進んでゆけばよいかを、学生自身で決断し、「歩んでゆける」あるいは「歩んでいこうと努力する」学生が減ってきているとの指摘があった。このような学生が自ら歩むべき方向を決定できるようになるためにも、国の施策が大事であると強調された。さらに、学校毎に目標が違うので、それにむかっの授業改善や生徒指導（授業をちゃんと受けられる姿勢、青年になるときのプライドと気概、人間としての学ぶ態度など）が大事であることが強調された。

最後に、「国際都市 Yokohama にある Nihon で有数な自ら Up date する進化型大学」としてまとめた。



シンポジウムでの松本講師

講演終了後、以下のような、活発な質疑応答があったので紹介しておく。

質問 1) 何故大学に行くのかということよりも、大学に入れることを重視していませんか。

高校によって切り口が違うが、偏差値教育から徐々に変わりつつある。また、入試一辺倒よりも、社会規範をつける教育、子供達が自らの力ではい上がってこられるような力をつけさせる教育へと変わらなるといけないだろう。このような変革が日本の底上げに繋がるであろう。

質問 2) 生物を学習しない学生が医学部へ進学することが起こっていると聞くが、何故このようなことが生じるのでしょうか。

従来は、カリキュラムに必修科目が揃えられていたが、多様性に応えるために、選択科目が増えてきた。神奈川県内の進学校は、がっちりとしたカリキュラムが組まれている。結果優先のためにカリキュラムがあるわけではないが、効率よく勉強することを重視している学校もあるようだ。この要因の一つとして、大学側の入試科目の設定方法にも問題があるのではいか。

質問 3) キャリア教育の観点から、実際に実施されていることは何でしょうか。

マイナスの面を見せるキャリア教育よりも、現場体験重視型の夢を与えるキャリア教育が必要ではないだろうか。また、塾での成功体験（先生がよく教えてくれた、大学に受かったのは先生のお

かげなど) が大きな意味をもっている学生にとっては、道筋を教えてもらいたいと考えているようだが、道筋を教授するのではなく、リテラシーを磨く指導をすべきであろう。

質問 4) 総合科目の現状はどうなっていますか。

学生自らが課題を持って研究するような科目と

なっている。

質問 5) AO入試、推薦入試などの面接対策をしていますか

スポーツと一緒にルールがあれば、それにそったやり方を考えることになるので、面接演習を実施している。

第 2 部 高度に組織化された受験対策の現状と初年度教育の意義

経済学部 深貝保則

第 2 部では『名ばかり大学生』などの著書のある河本敏浩氏によって、「高度に組織化された受験対策の現状と初年度教育の意義」をテーマとしての報告がなされた。昨今、大学教員のあいだではとくにいわゆる「ゆとり教育」以降の世代の学生の基礎的力量的の低下を憂う議論が多い。これに対して河本氏はより長くタイム・スパンをとって、共通一次試験導入後の受験状況の変化のもとでの学生の気質の変化を意味づける観点から検討を加えた。



河本氏による講演

河本氏は戦後日本の受験対策を分析するに当たって、黎明期=1960年代、勃興期=70年代、洗練期=80年代、爆発期=90年代、虚無期=00年代という5段階に区分し、それぞれの年代の特徴を次のようにおさえている。4年制大学への進学率が10%程度の60年代は「学士」が貴重な時代であり、そのため受験対策そのものが不要かつ不毛であった。60年代後半から70年代にかけて大学進学率が徐々に伸び始めて20%前後となり、それに伴って都市部の塾を中心に、中学入試、高校入試の受験対策が

始まった。しかし都市部を除いては、大学受験対策はもっぱら情報雑誌や参考書による勉強が中心であった。

大学進学率が25%前後まで上昇する80年代においては、1979年からの共通一次試験の導入も相まって大学受験対策予備校の全国展開や全国模試のスタートが見られた。そしてこのような受験対策のための予備校の確立により、「洗練」された塾・予備校が大学進学のために完備されるようになった。大学進学率が25%前後から徐々に上昇した90年代には、受験生となった第2次ベビーブーム世代が「洗練」された塾・予備校を支えた。またそれまで主に短大に進学していた女子も4年制大学へと進学戦略を変更したことによって4年制大学の需要が高まり、90年代は受験学力の絶頂期をむかえたのである。

2000年代になると、受験に求められる学力に質的な変化が起こった。それまでのセンター試験や大学入試問題に見られたような基礎的・基本的な事柄を問うのではなく、解答の選択肢のなかに「巧妙な引っ掛け」を忍び込ませる問題が散見されるようになってきたことに端的に窺われる。また00年代には公募推薦やAO入試といった入試形態の多様化が進んだことで、受験指導も各受験生のニーズに合わせた受験指導へと展開し、受験学力にも格差が拡大してきたといえる。この時代の日本の高校生の勉強に対する意識を見てみると、とくに現在の勉強に対する評価に見られるように、自ら問題を見つけ解決するような積極的な態度を持つわけでもなく、かといって競争や入試のために勉強させられているという問題意識を持っているわけでもない。では、このような流れのなかで、大学に求められる初年度教育の在り方とは何か。

河本氏が強調したのは、①ゴールを見せること、②ゴールに至るプロセスを示すこと、③座学・読書を通じての学びの姿勢の再構築という3点である。

この河本氏の議論をより広く、戦後日本社会の展開とそれに伴って生じた教育を取り巻く社会的文脈の変化のなかで受け止めることもできよう。1960年代に展開した高度成長期においては、工業高専の設立などが象徴的であるように知識と技術の修得を目的とする教育機関の展開が産業の進展にとって重要な役割を担った。当時の子世代は親世代に比して長い年数にわたる「高度の」学歴を得るなかで、農村から都市へ、ブルー・カラーからホワイト・カラーへと生活基盤を移していく傾向を生み出

した。こうして、教育を介して努力すれば報われるという文化が展開し、これは同時に受験への過熱を生むことにもなった。しかし、いわゆるバブル経済の崩壊後、様相は波動的に異なったものとなっていく。低成長下の労働市場の飽和によって高学歴は必ずしも良好な就労チャンスをもたらすものではなく、やがてはセカンド・スクールによって担われる資格が就職への特効薬であるかのような状況が生まれてきた。このような一連の変化のなかで、大学に入った学生たちが学ぶ領域へとどのように溶け込んでいくことができるのか、これが昨今直面している状況の一端であろう。

第3部 本学の事例紹介とディスカッション

ご講演いただいた松本先生と河本先生に加えて、本学から入学者選抜部門長の下城教授と教育人間科学部で基礎演習を担当している津野准教授、さらに、教育改善学生スタッフの伊藤さんと松永さんに加わっていただき、初年次教育に焦点を当てたディスカッションを、FD推進部兼務教員の金馬准教授の司会で行った。

初めに、下城先生から本学の高大連携の取り組みについて紹介の講演をいただいた。高校生が何をしたらよいかと考える時期もなく、大学入試にインセンティブを持って勉強している現実がある。そこから脱却するために、新たな意欲の火をつける活動として高大連携があるという紹介である。



下城先生の事例紹介

環境情報研究院 上野誠也

高校生にゴールを見せることで、大学で何を勉強したいのかという目的意識を持たせることができ、入学後の行動に現れることを望んでいる。



津野先生の事例紹介

次に、津野先生から基礎演習の担当の立場から講演をいただいた。学生に意識の変化が欠けているという指摘から始まった。すぐに答え合わせを求めたり、限られた考え方しかしないという例が紹介され、意識改革の必要性を訴えた。何を学んだからではなく、如何に学んだかが重要である。最先端の知識や技術は陳腐化しても、考える手段は永久に滅びることはないという分かりやすい説明だった。

そして、三番目の講演は学生の登場である。いきなりフランス語で自己紹介をして、聴衆の注目を集めた。そして、大学の教育への提案をはっきりを主張した。学び方が理解できずに学ぶことができない「大1プロブレム」を紹介し、基礎演習や教養教育科目の改善提案を次々と打ち出した。高校と大学とのあいだに過渡期が無いとか、1年生は将来の目標となる4年生と接したがつているなど、大1プロブレムの原因と解決策を説明した。

それぞれの立場からの3件の講演は初年次教育の必要性と方向性を的確に示すもので、有意義であった。それを受けて、熱のこもったディスカッションが始まった。ここでは全文を紹介することが無理であるので、それぞれの発言を要約した内容を記載している。発言された内容と若干のニュアンスの違いがあることをご了解した上で、会場で議論された望まれる初年次教育というものを理解していただきたい。



改革を提案中の伊藤さん

金馬：まず、基礎演習について議論しましょう。

松永：本を読んできて、学び方を学ぶという基礎演習を受けたのですが、本を読んでこない学生が結構いるのです。その時、先生から何で読んでこないんだとしっかりと行って欲しいと思います。先生が何も言わないと、読んでこなくても大丈夫なんだという意識が学生に生まれ、大学はこういうところなんだと思うようになるのです。最初が肝心なのですが、それが先生にできていないと感じました。やはり、目的がしっかりしているなら

ば、その目的を達成するプロセスを大切にしたいと思っています。

金馬：基礎演習の報告書を作ったのですが、本を読んできてもらえなかったという報告は結構ありました。松本先生、どう感じましたか。

松本：驚きました。横浜国大の学生さんが、先生の指示を守らなくて、授業が進まないと聞いて愕然としています。私の中学校では、読んでこいと言えば、読んできて、それから授業が始まります。学生の意識改革が必要ですね。それは裏返すと、先生達の意識改革にもなるのです。私は教育現場というものは個人商店の社長の集まりだと思っています。それが集まって、デパートになる必要があります。そういう先生方の意識改革があって、学生が変わると思います。横浜国大がこういう切り口で初年次教育に取り組んでいるのだということが外に対しても見えることが必要だと思います。

津野：三年前に基礎演習を初めて取組んだ頃、本を読ませて議論させようとしてかなり苦労しました。いきなり読ませようとするとう行き詰ります。それなりの準備段階が必要でした。本を読んで議論をする前には、お互いの顔と名前が一致している必要があります。その雰囲気を少しずつ作りあげて、二人で発表をすることを指示しています。そうすると何らかの相談を学生間ですることになります。手間隙をかけて、初めて目標が達成できるというものです。

下城：津野先生はうまくいった例ですね。私は高大連携で高校生に対して、大学へ行くならばどう先生が大学にいるかをインターネット上で調べことを勧めています。そして、どういう研究ができるかを調べて、意識を高めさせています。そうは言うのですけれども、学生たちは大学に入って本を読むことはしないです。ネットで生きているので、本に接することが苦手なのかもしれませんね。さらに、人前で話をするということにも恐怖感を持っているようです。話させるように仕向けられたら、もうこんな大学辞めてしまいたいとい



発言中の学生 FD スタッフの松永さん

う感じが伝わってきたのです。ひと頃に比べて、学生は変わってきていると感じています。

河本：人を動かすためには、選択と責任が力になります。選ばずに与えられると動かないですが、自分で選んだからには動かざるを得なくなります。自分で読む本を選ぶ機会を与えれば、読むようになります。それから、本を読まなければどのような将来になるかを分からせることも大切です。読んだらこういう4年生になる、読まなければこうなるということが分かれば、どちらを選ぶかということが生まれます。ゴールを見せながら、学生に多様な中から選ばせて、先生方が後押しをすることが必要です。

金馬：輪読の問題点から始まって、大学への教育改革へ展開して行きました。学生の立場からはいかがでしょうか。

伊藤：単位を出すことに疑問を感じたことがありました。自分の学科ではディベートの講義が前期にあります。準備にも時間がかかり、すごく苦勞する講義なのですが、いい成績がもらえません。ところが、落とした人のために、ほとんど同じ内容の講義が後期にあるのですが、簡単にいい成績がもらえるのです。講義間のバランスが取れていないと感じました。自分としては、簡単に単位がとれることは考える機会がなく、もったいないと思います。それから、GPA 制度は 2.0 以上を要求されていますが、普通にやっても 3.0 ぐらいは取れてしまいます。そうすると、勉強しなくてもいい

いかと思うようになりますね。就職にも関係しませんし。

金馬：個人商店からスーパーマーケットかデパートになる必要がありますね。会場からご意見はあるでしょうか。

参加者 A：高校は単位を取るという概念がないのに、良い成績を取ろうとみんな努力しますね。ところが、大学に入ると最低点でいいから単位が取ればいいと考えるようになります。どういう情報で考えが変わるのでしょうか。

伊藤：サークルの先輩には社会人の方もいる訳で、そういう方から情報が入ってきます。でも、自分は単位よりも考えることに意味があると思っていますから、できる限りのことをやろうと考えています。

津野：大学の成績と就職は関係ないということは、私の学生の時もありました。今もあるのですか。驚きですね。私は成績よりも、どこに学びがあるかを考えて欲しいなと思っています。必ずしも講義室の中にだけに学びはあるのではなく、いろいろな面であるのだという意識改革が重要です。

下城：二つの課題がありますね。一つは、大学の成績が就職に関係しないということ。もう一つは、科目によって成績の基準が異なることです。後者はFDに関わることなので、教員の中に説明責任があると思います。

参加者 B：優良可ではなく、可否で成績をつける科目があってもいいと思います。私は中国語を教えているのですが、単位をとりにくる学生が多いです。中国語を学ぼうというのではなく、履修基準が厳しいので単位を取ることが目的となっています。これが外国語の教育に障害となっています。全員に平等にするのではなく、もっと学びたい人には学ぶ機会を与えるような仕組みが必要です。今年新しい試みとして、中国の大学と連携して、学びたい学生に中国の大学の講義を取らせました。非常に良い効果が得られましたので、これからも続けようと考えています。必修レベル



登壇者の皆様（左から：金馬、松本、河本、下城、津野、松永、伊藤）

を上げれば、勉強するという考えは無理がありません。積極的に学びたいと思った人に積極的に学べる教育体制を我々は作るべきだと思います。

金馬：そのほかにも、会場からご意見はあるでしょうか。

参加者 C：二つ提案があります。一点目は大学が発行する成績証明書に不可を記載することです。そして、二点目は学生に渡す成績台帳に優良可の分布を記載し、それに対する学生の異議申し立てを受けられるシステムを作ることです。シンポジウムの結論を教員の意識改革だけで終らせずに、簡単なシステムの改革へ繋げることが大事です。これで教育は大きく変わると思います。

下城：私もこのシンポジウムを意識改革で終らせないことに賛成です。ところで、先程の成績は就職に関係しないということですが、世の中が変わってしまっていて、大学の教育の「知」と社会が要求している「知」がずれてしまっているということなのでしょうか。

金馬：時間が押してきましたので、皆さんから一言ずつご意見を伺いたと思います。まずは、伊藤さん、今の質問にどう思いますか。

伊藤：自分はサークルに所属していますが、コミュニケーション能力に長けた人が集まっています。だから、成績が良くない先輩でも希望の就職ができてしまうのかもしれませんが。

松永：成績に信頼性が無いのではと思っています。信頼性があれば、評価にも使われると思います。

私は成績評価を今後の勉強の方向付けに利用するために、先生に質問に行くことがあります。

津野：成績は結果であって、全てではないです。成績を使ってもいいですが、学生が学び方を学ぶシステムを初年次教育に取り入れていくことが必要だと思います。

下城：成績評価がある意味の機能不全に陥っているのではないのでしょうか。何らかの改革が必要なことはわかっていますが、ただ、過去の管理教育には戻れないことだけははっきりしています。

河本：成績が悪くて就職した人は、おそらく入社後も同じ問題が起こると思います。大学の先生は、大学は物質的にも精神的にも豊かにするところだと言い切ることが必要です。大学は自律型の勉強を学ぶことができる唯一の場所であるので、それを守っていただきたいです。

松本：初年次教育では、この学校に来て良かったと思わせることが大切です。母校愛を育てていくことが必要です。

金馬：論点がたくさんありましたが、各部局で続けて議論していただきたいと思います。自ら学び自ら考えるということを掲げているにもかかわらず、実現できていないです。学び方を教えることが必要ということ認識して改革に結びつけたいです。最後に、議論の場が必要だということを感じました。今後もいろいろな場を設けて、改革を進めて行きたいと思います。本日は、ご協力ありがとうございました。

部局FD活動紹介（経済学部公開授業）

経済学部 深貝保則

今年度の経済学部の公開授業として、前期に松永友有准教授の「基礎演習」を、また後期に武岡則男准教授の「ゲーム理論」を取り上げた。お二方とも他大学で専任教員として経験を積まれたのち経済学部に着任されて数年目。その経験を活かし、新鮮でメリハリのある講義を進められている。

経済学部ではかねてより1年生向けの基礎専門科目のひとつとして「基礎演習」を開講していた。しかし開講数が前期、後期にそれぞれ2～3コマであったため、1年次の経済学部生のうち2割程度が履修するに留まっていた。2008年度後半以降、経済学部教授会のもとでいかに学生に体系的な履修を促すのかという検討を開始した。その検討のなかで、基礎演習を積極的に活用する方向が打ち出された。まず、1コマ20名程度をめやすに1年のほぼ全員が履修するように11コマ分開講することとした。また、開講時期を1年次前期に揃え、レジュメの作成、図書の検索、レポートの作成、口頭での発表など基礎的な力量の涵養を図るため、「基礎演習」科目の中味の標準化を図ることとした。2009年度中に担当教員の打ち合わせ会議を含む準備を進めたのち、2010年度から新たな形での実施を開始した。さいわい95%を超える1年次学生が履修している。

松永先生の「基礎演習」では、履修メンバーが確定した4月下旬時点で「学生時代に何を読めばよいのか」という設定のもと、書籍、学術雑誌、新聞、インターネット情報のそれぞれについて履修者に目安を示す工夫が施されている。とくに書籍については、啓蒙書として定評のある新書、学術書として社会科学領域で定評のある出版社、古典として代表的な文庫など手がかりになる情報を示されたとのことである。また、4月から7月ま

でのスケジュールを履修者が早い時期に理解するように、5月前半の時点で7月に行われるべき3つの報告テーマと取り上げられるべき文献が予告された。「日本人の国民性」としてルース・ベネディクト『菊と刀』以下7点、「民主主義を考える」として杉田敦『デモクラシーの論じ方』以下8点、「福祉政策の将来像」として広井良典『日本の社会保障』以下6点のなかから、各履修者は7月に口頭の発表を行なうかレポートを提出することが求められる。5月から6月にかけてはたとえば「レポート・論文の書き方」という設定のもとで、入試小論文との違い、無断引用やネットワークからのコピーは行なってはならないこと、基本構成の組み立て方などをはじめとして、基礎的な作法についての解説が行なわれた。

このような積み重ねのうえで、7月20日の公開授業の折には、上記「福祉政策の将来像」のテーマのもとで3名の学生が報告を担当し、それぞれについての質疑がなされた。それぞれおおむね30分弱の持ち時間のなかで、文献リストから選んだ書物について焦点を絞って準備したレジュメをもとに報告を行ない、教員、履修者それぞれからのコメントや質問を受けて答える、という形で進められた。経済学部の「基礎演習」は、入学当初の学生が一冊の書物を読み、まとめること、ある関心やテーマのもとで調べること、発表し、議論を交わすことなどの基礎的な力量を培うことを目的としている。次年度に向けて担当者は入れ替わるが、個々の教員の工夫を引き継いでいく機会を通じて、今後の展開が予定されている。

つぎに11月17日の武岡先生の「ゲーム理論」は、印刷した特製の配布教材を踏まえて進められた。1限で中途から入室する学生も多少は見受けられるものの、概して開始時点から出席している熱心な学生が多かった。

当日のテーマは、オークションの方式をめぐって、オランダ式オークションとイギリス式オークションとを対比しつつ、それぞれの方式のもとで、各買い手、各売り手はどのような戦略をたてることが最適であるのかを検討するものであった。前回からの続きで2回の講義をこのテーマに当てたとのことであったが、当日は講義の時間帯を3分割して進められた。まず、冒頭の1/3の時間で前回の議論簡単な整理を踏まえて新たに概念をイメージとして掴むための説明がおこなわれた。次の1/3の時間で数学的に説明が加えられた。そして残りの1/3の時間で、配布教材に掲載の条件設定を若干変えた問題を使って内容を確認するための説明が加えられた。この1/3の時間帯の区切りごとに学生からの質問を受ける機会を設けながら進められた（実際に質問・発言する学生はほとんどいなかったが…）



授業風景

全体として、ともすれば難解と思われがちな理論的テーマについて、図を用いてイメージを与え、たうえで数理的に説明をおこなうなど、学生の理解を促す工夫が施された講義であった。教材を配布しつつも黒板を多用したいわば伝統的な講義ス

タイルであるが、数理的な説明について学生が内容をフォローしつつ聴くためには適度なテンポである。



授業後のインタビュー（右端が武岡先生）

なお、黒板の照明が上から数ヶ所で照らし出すものであったため、明暗のムラがあって見えにくい状態であった。そこで経済学部学務係および学部長との相談により年度内に照明の付け替えが行われることになった。



部局FD活動紹介（工学部公開授業）

工学部 森下 信

はじめに

Faculty Development、いわゆるFDに対しては、工学部を担当する教員はまだ十分な認識を持っている方が少なく、結果として自ら思うがままに講義を行っている場合がほとんどであるように感じる。教員として大学に就職して以来、誰も講義の方法等教えてくれる場などなかったのも、ある意味仕方ない。しかしそのような訓練する場を設定しても、忙しいという理屈にならない理由で教員には足を運んでいただけない。さらに、「大学では学びたい学生だけが学ばばよく、教え方など問題ではない」という旧来の確固たる意識・思想が教員の中に残っており、学生の意識の変化など考えもしない教員が多い。現代の学生は、大学に入るまでの教育が年配の先生方の受けた教育と大幅に変化しており、それを配慮しないと学生がついてこない。現代の学生の教育は、おそらくは大学で閉じてできるものではなく、社会全体で行う必要ができていくほど危機的である。それでも教え方の参考にするために、全くないよりよいと考え、全学ベストティーチャーとして選ばれた先生方に公開の講義をお願いした結果、教える内容と講義日程が全体スケジュールと合致した2名の先生方が受け入れてくださった。ここでは、その一部を紹介したい。

谷和夫先生の講義

谷先生の公開講義は平成22年11月25日（木）4限に土木工学棟セミナー室で行われた。講義名は「応用地質学」で1年生に対する教養科目である。その様子を下記の写真に示す。谷先生は最初にプリントを配付されて試験を始めた。何をされるのかと思って参観していると、試験中に学生の名前を確認しながら資料を配付し、試験答案はある時間経過の後に提出させ、それが終わったら写真のように、答案の



谷先生の授業風景

解説を始めた。試験の最後の問いとして「予習範囲における疑問点と理解できない点」を記載する部分があり、その解説とのことであった。解説はパワーポイント主体であり、大切なキーワードは大きく板書し、間違った答案例を示しながらの講義であった。谷先生の講義は予習主体であり、予習をしてこないと試験は何もできず、白紙で提出せざるを得ない状況に学生をおいている。学期の授業の最初では複数人が白紙で提出することがあるとの話だったが、授業が進むにつれて確実に予習を行う学生が多くなり、主体的な学習態度が身につくのを狙っていることが一目瞭然であった。このような形式の講義も十分成立し、しかも予習する中で自ら新しい知識を吸収する訓練になると思った次第である。シビルエンジニアリングコースの学生数は少ないので、30名を少し超えた学生が授業に参加していたが、誰も居眠りをせず、また学生に授業中のおしゃべりをする間すら与えない、素晴らしい講義である。

吉川信行先生の講義

吉川先生の公開講義は平成22年11月26日（金）3限に工学部講義棟C-301室で行われた。講義はまさに専門科目の「集積回路工学」であった。この様

子も下記の写真に示している。吉川先生の講義は、ある意味オーソドックスであり、パワーポイントを使い、またある部分は黒板を使って明瞭に学生に伝えていたのが印象に残っている。パワーポイントの内容は学生に配付し、学生は映される教材と手元の資料を見比べながら、必要に応じて黒板に書かれた内容を資料に書き加えるという講義であった。多くの学生が聴講しており、真面目な学生もそうでない学生もいて、大学としての平均的授業風景を垣間見た気がした。吉川先生の講義は重要なポイントは自然と説明を繰り返すので、学生も理解しやすいのだと思われた。それでも学生から高い評価を受ける理由のひとつは明瞭な言葉での説明であり、また、学生の側を直視しながらの講義態度であると感じた。これもすばらしい講義であると思う。



吉川先生の授業風景

よりよい講義を行うために

講義に関して、教員が10人いれば10通りの方法があることは承知している。大学で行われる講義は個性的であることが大切である。それを前提として、各教員が自分の講義を常に見直してさらによりよい講義に仕立てることをお願いしたい。「良い講義とは何か」という定義がある訳ではない。簡単に単位がとれるという単純な理由で学生に人気のある講義もある。本来、工学という学問は難解で、それを噛んで砕いて教えることが本当に意味のあることなのか、という疑問もある。しかし、難しい内容をそのまま難しく教えたのでは、現代の学生は取り付く島もな

いどころか、学問そのものから逃避を始めかねない。学生にどのように考えさせ、理解させるかということが最も大切なように思う。

基本に立ち戻り、以下のような観点で講義をお願いしたい。

- (1) 明瞭に講義内容を伝えること。
- (2) 聴講する学生と教員が双方向の意思疎通を図りながら講義を進めること。
- (3) 予習または復習を学生に課すこと。

この3点を確実に実施するだけでも大学の講義として十分通用するように思う。

おわりに

建設学科を担当する谷和夫先生と電子情報工学科を担当する吉川信行先生には公開講義にご協力いただき、お礼申し上げます。特に吉川先生におかれては事務的な連絡がうまくゆかず、公開講義の日程が先生のご指定の通りにならなかったのに対応していただきました。お二人の講義は「奇を銜う」でもなく、しかし話し方は明瞭で、理論整然と授業を組み立てておられたように感じる。谷先生の講義は無駄口をたたく時間も学生には与えず、しかも双方向のコミュニケーションをとりながら進めているのが印象に残っている。吉川先生の講義はオーソドックスな講義形式ではあるが、パワーポイントを上手に利用して、説明の時間を十分確保していた。人数が多いためか、後ろで学生が居眠りをしている場合もみられたのが残念であった。しかし共通点は明確な話し方により黒板相手ではなく学生相手に講義をしているのが特徴であった。

是非、多くの先生方がこのような講義を参観し、ご自分の講義の参考にさせていただきたいと願っている。兎にも角にも、公開講義に足を運んでいただかない限りは伝える術もない。特にこれからの大学教育を担う、就職してからまだ公開講義を一度も参観していない年齢の若い先生方に、講義に対する積極性と授業改善に関する関心をもっていただきたいと思う。

授業コンサルテーション実施報告

FD推進部専任教員 安野舞子

本誌第12号でお知らせした通り、本年度よりFD推進部では「授業コンサルテーション」事業を開始いたしました。授業コンサルテーションとは、「教育コンサルタントがクライアントである大学教員と共に授業の課題を発見し、解決策を共に模索する取組」のことです。

ただし、本年度は本事業の導入年度ということもあり、本サービスのご利用について積極的にアピールさせていただくことはせず（とはいっても、本誌第12号ではご利用を呼びかけさせていただきましたが・・・）、前期を「試行期間」とし、こちらから協力を依頼する形で6名の先生方に授業コンサルテーションをご体験いただきました。本稿では、その6つのケースを通して得られた知見についてご報告いたします。

授業コンサルテーションの概要

本コンサルテーションでは、「データ」をもとに、コンサルテーションをご依頼くださった先生方の「よりよい授業創り」について一緒に考えていきますが、その「データ」の収集はMSF（Midterm Student Feedback）と呼ばれる、米国で開発・実施されている手法で行います。MSFとは、その名の通り、学期の中間期に授業担当者から依頼を受けた教育コンサルタントが教室に入り、グループワークを通して受講生から当該授業についての意見を聞き取るものです。

授業コンサルテーションの一連の流れは以下の通りです：

- 1) **事前面談** コンサルタントが入る授業の概要、学生の様子、授業について気になっている点等について、授業担当者から話を聞く。
- 2) **MSFの実施**

- 3) **事後面談（フィードバック）** コンサルタントがまとめた「学生のコメントシート」を授業担当者に手渡し、そのコメントシートの内容をもとに当該授業について意見交換する。授業担当者が課題解決を希望すれば、コンサルタントは必要な情報を提供し、共に模索しながらその解決に向けて取組む。
- 4) **学生へのフィードバック** 授業担当者は、次の授業において、学生のコメントに対する意見や回答を伝える。
- 5) **フォローアップ** 学期終了後に授業の様子を確認する。



MSFの実施風景

学生・教員に対するアンケート調査の結果

上記の一連の流れの後、今回は授業コンサルテーションの効果検証を行うべく、ご協力いただいた6名の先生方すべてのクラスにおいて、MSFを経験した受講生に対し「フィードバック・アンケート」を実施していただきました。更に、その「フィードバック・アンケート」の結果に対する先生方の感想・意見を伺うアンケートも実施しました。

まず、学生に対する「フィードバック・アンケート」ですが、このアンケートへの回答は任意とした上で、6クラス（科目）・111名の学生から回答を得

ることができました。

アンケートでは、MSFを行った後の授業における担当教員および学生自身の行動変容について尋ねましたが、表1に示すように、約4割の学生が「教員には変化があった」と答えていました。一方、「自分自身に変化があった(=受講態度が変わった)」と答えた学生は2割程度でした。このように、教員の行動変容を認める割合の方が高いのは、ある意味、当然といえるでしょう。何故なら、MSFでは担当教員の授業の「良い点」および「改善して欲しい点」について学生から意見を聞き取っているのであり、それを受けた担当教員は、学生からの意見を参考に、必要に応じて授業を改善していくからです。

しかし、2割程度の学生とはいえ、MSFを通して受講態度が変わる、という点も見逃せません。「受講態度が変わる」とは、具体的にどのような変化なのでしょう。アンケートでは、「ヒアリング調査を受けた後で、あなた自身に何か変化はありましたか？」という質問に対し「はい」と回答した学生には、「この授業に対するあなたの心情、態度、言動の変化についてお書きください」と聞いています。実際、回答には、次のような記述が見られました：

(例)

- ・先生に改善して欲しいという前に、自分の授業に対する態度を改めなければならなかった。
- ・もっと能動的(積極的)に授業に臨もうと思った。
- ・せっかく、こういう調査を受けて先生がやり方を変えてくださったので、自分もしっかりその態度に応えられるように更に集中した。

このように、授業コンサルテーションの一環としてMSFを行うことで、担当教員は受講生の意見を参考に残りの授業を改善することができるだけでなく、学生にも受講態度の変容を促す可能性があるといえます。その相乗効果として、受講生の学習が促進されることは想像に難くありません。

表1 フィードバック・アンケートの結果

質 問	はい	いいえ	分からない
ヒアリング調査を受けた後で、 <u>授業担当者</u> に何か変化はありましたか？	46 (41%)	9 (8%)	56 (51%)
ヒアリング調査を受けた後で、 <u>あなた自身</u> に何か変化はありましたか？	21 (19%)	58 (52%)	32 (29%)
このヒアリング調査を、今後、他の授業でも行うのは良いと思いますか？	61 (56%)	9 (8%)	39 (36%)

次に、このMSFが学生にどの程度受け入れられたかを尋ねる項目では、半数以上の学生が「このヒアリング調査を他の授業で行っても良い」と答えていました。ただし、「〇〇先生はしっかり授業をなさっているのに、もっとヒアリング調査が必要な人がやるべきだと思う。」「アンケートで評価の悪い先生に対してやって欲しい。」という痛烈なコメントが示すように、MSFを実施するためには授業時間を20～25分程度削らなくてはならないこともあり、必ずしも「どの授業でも」ということではないことが窺えます。

最後に、この「フィードバック・アンケート」の結果に対して先生方の感想や意見を伺ったところ、次のような声が聞かれました：

- ・授業に直接関わりが無い教員の関与により、学生が客観的に教員の指導の仕方や自分たちの授業の受け方などを振り返ることが出来たことがアンケートの結果や自由記述に現れていて、一定の効果があつたと思われる。
- ・中間期にアンケート結果が来ると、即座に講義へ反映できるのでありがたい。期末のアンケートでは、結果が出てから半年経ってから改善を示さなければならぬので、意識が薄れる。特に今回は、評価した学生が目の前にいるのですから、改善しなければいけないという意識がありました。

本年度は、「試行期間」ということもあり、こちらからご協力いただく形で授業コンサルテーションを行いました。来年度はぜひ、一人でも多くの先生方にこのサービスをご利用いただければと願っております。

教育改善学生スタッフ 「学生リーダーズ合同研修」参加報告

FD推進部専任教員 安野舞子

「学生リーダーズ合同研修」参加の経緯

昨年10月に誕生した教育改善学生スタッフ(以下、学生FDスタッフ)は、これまで、他大学で行われた教育改善に関する学生交流イベント等に参加し、学生FDスタッフとして本学で何ができるか模索してきた。今後、学内で様々な活動を展開してくれることを期待しているが、彼ら・彼女たちは、「学生」という立場で本学の教育改革を推進していく「リーダー」といっても過言ではない。

そこで、学生リーダーとしての素養を更に磨いてもらいたいという思いから、愛媛大学のリーダーシップ養成プログラムである「愛媛大学リーダーズ・スクール(ELS)」の担当者に掛け合い、ELSの合宿研修に本学の学生FDスタッフも参加させてもらいたい旨を依頼した。筆者が相談した丁度その頃、京都外国語大学からも同様の依頼があったとのことで、期せずして複数大学合同の合宿研修が実現することとなった。

「平成22年度 学生リーダーズ合同研修」は、平成23年2月22日(火)～23日(水)、愛媛大学キャンパス内にて行われた。本学の学生FDスタッフからは代表5名が参加し、愛媛大学の学生20名、京都外国語大学の学生11名、松山大学の学生1名の計37名が参加した。なお、本学からは金馬FD推進部兼務教員、および筆者が引率として参加した。

合同研修がどうであったか、また参加した学生FDスタッフが研修を通して何を得たのかは、ご本人たちに語ってもらうのが一番である。そこで、本稿では、参加した5名のうち3名の学生FDスタッフによる手記を紹介したい。

合同研修に参加して：学生手記

経営学部 経営学科 1年 森戸俊行

私は、このリーダーシップ研修を通じて多くのことを感じ学びました。研修自体が3つのプログラムに分かれていたので、1つずつ述べていきたいと思います。

まず、最初のリーダーシップに関する講義では、リーダーシップを発揮しなければならないのは必ずしもトップのリーダーではなく、相手が居さえすれば誰もがリーダーシップを発揮するものなのだと学びました。そして、その後に行ったポートフォリオの作成では、今まで自分について自分だけの視点でしか考えたことが無かったため、その日に組んだパートナーの視点が加わることで自分の気付いていない点までより一層深く自分を顧みることができました。

2日目のグループワークでは、リーダーに必要な資質についてグループで調べ、発表し、順位を競いました。私のチームはプレゼン力についてだったのですが、入賞もできず、グループ活動の中でもあまり自分でリーダーシップを発揮できなかった点が残念でした。しかし、自分たちで実際に調べたり他のグループの発表を聞いたりしたことで、リーダーに必要なとされる資質に関しての見識が深められました。

今までにリーダーシップの本を読んだりして勉強したことはあったのですが、実際に活動することで体感できる機会は少なかつたため、いい経験になりました。この2日間で得た知識や経験を活かして、これからの学生FD活動に役立てていきたいと思えます。

教育人間科学部 国際共生社会課程 2年 伊藤恭介

私はリーダーシップに関する研修を受けたことが無かったので、今回の研修は非常に有意義なものとなりました。感じたことや思ったことはたくさんあるのですが、その中から特に重要だと感じた3点をここでは述べたいと思います。

まず1点目。リーダーシップを発揮するにはユーモアが必要だということです。研修の中で、相手がいれば誰もがリーダーシップを発揮することになるという言及がありましたが、それにはまず相手に心を開いてもらわなければなりません。もちろん友達同士なら構いません。しかし、初対面の人にリーダーシップを発揮しなければならない時には、まず笑わせて相手の警戒心を解く必要があります。今回の講義の方々はその非常に良くできていて、FDの活動の時も見習わねばと感じました。

次に2点目。「自分」に終わりは無いということです。研修では2人組で自身の信念、ビジョンについてのポートフォリオを作成しましたが、これだけで満足してしまっただけではこれをやった意図が掴めていないと思います。周りの人を引っ張っていくにはまず「自分」を知っていないといけないという考えのもと、今回の研修は進んで行きました。けれど、その「自分」が深く突っ込まれてボロが出るようなものではどうにもならないでしょう。今回作ったポートフォリオをひな形として、これからも他の人に協力してもらいつつ「自分」を深めていかねばならないと感じました。

最後に3点目。論を紙にまとめることの難しさです。最後のリーダーに必要な資質についてのポスターセッションで有益な意見が出ても、それを上手く紙にまとめられず苦しみました。論争が激化するとこの傾向はさらに強くなると思います。妥協点を見つけるのではなく、状況を分析して議論を昇華させる能力がリーダーには必要だと感じました。

以上3点が今回の研修を終えて特に感じたことです。これからも様々な活動に参加し、FD活動に活かしていければと思います。



参加者全員での記念撮影

教育人間科学部 学校教育課程 3年 松永佳那子

「人生観が変わりました」、「自分が本当に変わったんです」。愛媛大学の ELS (愛媛大学リーダーズスクール) の受講生は、自己の学びや成長を実感して生き生きとそう語っていた。自分のしている活動を説明するプレゼン能力も素晴らしく、その活動に自信や誇りを持っている様子は眩しかった。そのような学生たちと共に2日間のリーダーズ合同研修に参加できたことは大変よい刺激となった。

リーダーシップとは「だれでも・いつでも・どこでも」発揮できるものである。研修の初めに「リーダー」に対する視野が広げられた。確かに、リーダーシップは全ての人にとって、具体的行動を決定する際に必要とされるものである。当然ながらその個人やその集団、抱える課題や問題によって必要となるリーダーシップは異なるが、共通して言えることは、自身やその集団が前進するプロセスの中で、各個人が主体的に生きるために必要であるということだ。自己開示せずに、周りに流されて生きる生き方は楽かもしれない。しかし、楽しくはない。本当の信頼関係も生まれない。自己を曝け出し、他者の自己開示を聴き、自己が揺さぶられることは、成長のために必要な試練である。この研修の中で初対面の学生と自己を曝け出し合う体験をしたことは、自分の殻を破る貴重なきっかけとなった。そして、自分が前向きに動き出したように感じている。他大学の学生との交流で喚起されたこのエネルギーを、学生FDの活動への貢献につなげていきたい。リーダーズ合同研修に参加させて頂いたことに感謝する。

TA 研修会

- その対応は正しいですか? -

TA（ティーチング・アシスタント）も大学の教育を担っています。**大学教育の質**が問われている現在、よりよい教育を実現するために、TA 向けの研修会を開催します。新規採用の TA の院生が対象ですが、継続採用の TA や教職員も参加できます。

◆開催時期：

実験・実習担当

平成 23 年 4 月 13 日（水）16:20-17:40

講義・ゼミ担当

平成 23 年 5 月 25 日（水）16:20-17:40

詳細はポスター等で連絡いたします。多くの TA が参加するように声を掛けて下さい。

主催：大学教育総合センターFD 推進部

ご意見・ご感想がありましたら、下記宛までお寄せください。

YNU FDニューズレター No. 15

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

作成担当：ニューズレター・ワーキンググループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp

発行／平成 23 年 3 月